

フィラコリア2014 見学記

大沼幸雄



写真1 会場となったコエックス(コンベンション・センター)の前面



写真2 会場のイベント・エリア

フィラコリア2014が8月7日～12日（6日間）ソウルで開催されました。小生は、いつもの「ベーターヴェン –その生涯と遺産–」（8フレーム）を出展し、ブラジルに次いで2回目の大金賞を頂くことができました。二回目は、厳しい目で見られるので、慎重にというアドバイスを諸先輩から頂いていたので、おっかなびっくりで出展しましたが首尾よく行って正直ほっとしています。ブラジルでも主査のヘルストロームさんから、「希少性については、審査員で異なる意見も出るから、1-2点は上下する可能性があるよ」という警告も受けていたし、何せ日韓関係が悪化している現状では、何が起きるかもしれないという不安もありました。3回大金賞を頂くと、チャンピオン・クラスに今後10年間に5回まで挑戦できるそうです。もう一度気合を入れチャレンジしたいと思います。

今年のフィラコリアの会場は、5年前のフィラコリア '09（FIAP展）と同じCOEXです。オフィシャル・ホテル「リヴィエラ」に宿泊しました。会場とホテル間は、頻繁にシャトルバス・サービスがあり至極便利です。今回の世界展のテーマは「平和・愛・調和」で、韓国側は、文部省、南北統一省、文化・スポーツ・観光省、ソウル市が後援し、繁華街の明洞地下鉄駅にも大々的な広告を出すくらい力の入れ方です。カタログの表紙には「切手とは？ それは文明の証人」とのキャッチ・フレーズがあります。ウェブサイトの組織委員会の名誉総裁である科学・ICT・企画大臣の挨拶文を読むと「切手は、政治・経済・文化・歴史を映し出す文化遺産」である。また「切手は、発行国の文化成熟度」を示すなどとあり、米国大統領のルーズベルトの有名な言葉「切手収集は、王様のホビーであり、ホビーの王様である。私の人生は、趣味、とりわけ切手収集に負うところが大き



写真3 開会式で挨拶するFIPティ会長



写真4 ディーラー・ブースの光景



写真5 テーマティク部門の展示会場

ある」が引用されています。格調の高い表現が多く、韓国では、切手収集の国策に占める位置が非常に高い印象です。

競争出展では、参加国は68ヶ国、規模約3000フレーム、出展数519作品（含む文献など）。国別内訳は、第一位は、ホスト国の韓国40、第二位米国35、第三位日本、ドイツで共に26、続いて中国18、オーストラリア17、香港・ロシア・スペイン各15、英国13、スウェーデン12、カナダ・台湾・インドネシア・パキスタン各10点の順（以下省略）で、やはり国力と開催地への地理的隣接度が反映されている印象です。

クラス別内訳は、郵便史と文献がそれぞれ全体の21%、伝統が19%、ユースとワンフレームが8%、6位がテーマで7%という順です。

伝統、郵便史、テーマの三大部門のみを比較すると、郵便史44%、伝統40%、テーマ15%ですから、テーマは、先発の2部門に比べまだまだその地位が低いといえます。

テーマティク作品の出展数（合計36作品）を国別に見ますと、第一位は韓国10で突出しており、第二位はブラジル3、第三位は2（中国、イスラエル、日本、モンゴル、スペイン、タンザニアの6ヶ国）あと11ヶ国は各1と言った状況です。韓国でテーマティクが盛んな理由として、日韓併合（1910～1945）の歴史が長く、日本人コレクターがほとんどの良いモノを手中に収めているので、伝統、郵便史よりテーマティクに力が入っていると聞いたことがあります。私見ですが、韓国では、郵趣は知的レベルの高い人たちの遊びとされている印象です。テーマに取り組んでいる人の中には、私の知る限りでも、大学教授、弁護士、医師などプロフェッショナルが多数います。今回のテーマ作品も「水」「森林」「南極大陸」「海」「クラシック音楽」「西洋美術」「子供」「クリスマス」「橋の美学」「天文学の歴史」など実に多彩なテーマを取り上げています。

如何に韓国が突出しているかは、昨年秋までにアジアからテーマティクで「大金賞」を取ったのは、「食の歴史」で三回（キーフオン・キム氏）、「防疫」で一回（セヨン・チャン氏）と、いずれも韓国人だけであったことから分かります。キムさんとは、2006年ワシントン世界展以来の友人で、親しい交際をしています。今回もソウル・タワーのレストランで高級な韓国料理をご馳走して頂きました。現在は、北京で30歳

台前半の新進気鋭のビジネスマンとして活躍していますが、彼のマルチなタレント性にはいつも目を見張ります。医師のチャン先生は、二度ほど審査員として批評を頂きました。厳しいけれど心の通った指導が心に残っています。昨年ブラジルで大金賞受賞のときに、わざわざ「おめでとう。日本ではテーマでは初めての大金賞ですね」という祝電をいただきました。心に掛けて頂いただけで感激しました。今回は審査員としてリストに載っていたので、てっきりお目に掛けられると思っていたら、見当たらない。韓国の友人に消息を聞いたところ「二ヶ月前に病気で倒れ入院中です」「彼は、審査員としてもテーマティクの先生としても優れた人です」とのことでした。ひたすら快癒を祈るばかりです。

テーマティク部門の受賞数（合計36作品）内訳は、大金賞2、金賞9、大金銀賞10、金銀賞5、その他10です。大金賞は、ダミアン・レーグ氏の「羽毛に魅せられて」（97点）、小生の「ベートーヴェンーその生涯と遺産ー」（95点）です。レーグ氏の作品は、グランプリ候補作品となりましたが、残念ながら、グランプリ受賞（ドナー、インターナショナル、ナショナルの3種あり）は成りませんでした。今回は、チャンピオン・クラスには、テーマティクから「子供たちーそ



写真6 受賞作品の前の筆者

の最初の10年」(ドイツ)が出版されていましたが、グランプリ候補に選ばれませんでした。過去何回かテーマチックからチャレンジしていますが、私の知る限り、いまだグランプリ受賞に至った作品はありません。何時の日か、テーマチック作品が、この厚い壁を破る日が来るのを期待したいと思います。金賞の9作品は、内藤陽介さんの「香港の歴史」(92点、日本)、「セレンゲッティ王(ライオン)の旅」(91点、インドネシア)、「登山」(92点、スロヴェニア)、「神の天使たち」(93点、オーストラリア)、「太陽、海、波、砂」(91点、ブラジル)、「海の記録」(90点、韓国)、「地平線の征服」(92点、スペイン)、「人形劇の発展史」(90点、英国)「算盤からタブレットへ」(90点、ベルギー)です。

ところで私のソウル作品は、去年のブラジル作品と比べ、基本的構成は全く変わりません。私の作品は一冊の本のような構成になっているので、いきなり抜本的に組み替えるのは難しいからです。従い、変更点は前回の講評を踏まえての手直しです。結果的には、128リーフのうち、36リーフの入れ替えを行いました。

1. (1リーフ) プランページにQRコードを入れて「第九」を鑑賞しながら作品を見るという趣向です。これには江村代表に設定のご協力を頂きました。



図1 ゲーテ切手・最終原画



図3 郵便ラッパ切手・スケッチ



「第九・第四楽章」の
入ったQRコード



図2 発行済切手
(ドイツ 1982年
ゲーテ没後150年記念)



図4 発行済切手
(ドイツ帝国 1944年
切手の日)

2. (17リーフ) 高級品に入れ替えました。(ゲーテ切手・最終原画、郵便ラッパ切手・スケッチ、パイロンのエッセイなど)(図1~4)
3. (4リーフ) ステーショナリーの未使用から使用済みへの変更。これが意外に難しく、ごくありふれたステーショナリーの使用済すら多数未入手です。
4. (3リーフ) 実郵便でも達筆で外見の美しさのあるものに。
5. (11リーフ) レートが適正か否かに関する記述を付け加えました。適正レート(仕向地、速達、書留、航空便など)の調査は意外と苦勞をしました。イタリア、ハンガリー、ソ連などは皆目見当がついていません。この調査で面白い効果があったのは、実郵便でも、真正か、郵趣的に作られたものかの見分けがつくようになったことです。一見、真正そうでも、実際には作られたものと分かり、気落ちした例もあります。世界展のレベルに来ると、やはり、真正度が高いほど良いのは言うまでもありません。

さて、今回の審査ですが、モレノ氏(スペイン)、マース氏(ドイツ)、キム氏(韓国)があたりました。作品数がすくなかったのも、自然、文化、科学を分けずに全部を同じ審査員で担当した由。講評には、三名全員が加わり、マース氏が中心に説明しました。この方は2010年リスボンで「数学」での「大金賞」受賞者です。その時に作品を参考に眺めていたら「何か質問があるか」と近寄って説明してくれたので面識はありました。

私の作品の点数95点ですが、ブラジル世界展に比べてタイトル・プランが1点下がり、独創性が1点上がった結果、同点となりました。

講評の要点は次の通りです。

お褒めを頂いた点は、

1. 一音楽家の人生を扱うにあたり、時代背景を入れてスコープを広げたことに独創性がある。一般には、人物史に時代背景を入れたものほとんどない。また、一人の作曲家のみで8フレームも作ったのも素晴らしい。
2. 希少性の高いものとして高い評価のあったマテリアルは、ファンシー・キャンセル、パロン・モンテ、製造過程を示したブルーフ類などです。

一方、今後の要改善点は次の通りです。

3. 希少性の向上：（例：ダイ・ブルーフは、優先度の高いセピアまたはカラーへ入れ替える、一部のステーションナリーは、遥かに希少性の高いものに入れ替え）
4. 原画の配置の工夫（周囲の希少品の影が薄くならないような工夫）
5. テーマの本筋から逸脱しないこと（一部の記念印が、ベートーヴェン本来のテーマから外れている）
6. 章と節のタイトルとの違和感のあるものを是正
7. 陳腐なマテリアルは入れ替えが必要。（モダンなステーションナリー、記念印など）

なお、QRコードは、面白いアイデアとして評価を受けるかなと期待していたのですが、案に相違して「これは参観者を楽しますには良いが、審査上の加点にはなりません」とマースさんから言われてしまいました。

総じて審査員の指摘は細かく具体的で、第三回目のL G挑戦に向けた改善の大きな糧となりました。

国際展に出かけるメリットは、観光見物もかねている点です。私はいつも夫婦で「フィラホリデー」と称して、時間を見ては積極的に出かけることにしています。今回は、南大門、明洞の繁華街ヘショッピングに加えて、趣向を変えて「戦争記念館」と「ソウル大学」の見物に出かけました。

戦争記念館は、35,000坪の敷地（東京ドームの2.5倍）の日本の国会議事堂を連想する巨大な記念館です。正門へ上る階段を見上げると「平和と自由のために戦争で犠牲となったヒーローたちを永久に忘れません」とハングルと英語で書いてあります。これだけ巨大な施設を、入場無料で維持するところは祖国防衛への国の強い意志の表れでしょう。ソウルからわずか80キロに北朝鮮との国境であることを考えると、四面環海の日本人とは危機意識が全く異なるのでしょうか。驚いたのは、館内に入るといきなり竹島（韓国語で“ドクト”）の

大きな映像がライブで放映されていることです。どの角度から撮影しているかわかりませんが、波打ち際には白波が打ち寄せているのでライブと確認できました。隣には、ドクトの模型があり頂上には韓国旗が立っています。ここは撮影コーナーで、参観者が盛んに記念写真を撮っていました。戦争歴史室では「日本に侵略された・・・」という表現が耳に入りました。聴き入ると秀吉の朝鮮出兵の時に日本の水軍に勝利した亀甲船を前にした解説でした。やはり侵略された側にとっては、歴史に刻まれた深い傷ということでしょう。この記念館は、全体の3分の2程度が朝鮮戦争に当てられていますが、海外派兵、国軍発展、大型防産装備室のほかに、英霊の護国追慕室があり、ここには英雄の胸像、20万人の英霊の名簿が奉安されているとのことでした。

ソウル大学は、韓国の超エリート大学ですから、ぜひ一寸のぞいてみたいと出かけました。地下鉄のソウル大学入口で降り、ソウル大学行きバスとあったので飛び乗りました。韓国では意外に英語が通じず困っていたのですが、車中で大学生と思われる若い人に話しかけたらスラスラ英語が出てきて、さすがに秀才と感心。ソウル大学正門で降りようとすると「ここから歩くと大変だから次で降りる方が良い」とのこと。なるほど日本の大学から想像したのと違い、広大なキャンパスで、林の中に建物が点在しています。キャンパス内は大学専用のシャトル・バスが廻っていました。あとで分かったことですが、1970年代に、激化した学生運動を封じ込めるために市内に散在していた学部を、医学部を除き、すべて冠岳の山すその米軍のゴルフ場跡地に強制移転したそうです。昼食時になったので、カフェテリアを探して、ワイワイ・ガヤガヤの学生たちに交じり一食4000ウォン（約400円）の辛い蛸スープ定食を食べましたが、結構美味でした。アジアの大学の中では、中国・韓国の追い上げが激しく、日本の大学のランキングは、投資抑制、国際化への遅れで、次第にずり落ちつつあるそうです。ソウル大学キャンパスを垣間見た程度ですが、何やらアジアの熱気を感じました。

末筆ですが、最近の日韓関係から多少懸念をしていたのですが、そのような心配はなく、韓国の友人たちは、温かく遇してくれました。両国のリーダーたちの考えで関係悪化がエスカレートしていますが、民間の交流を通じて「同じように人間が生きている」ことを実感しあうことは大切です。その意味で郵趣の場を今後も大切にしたいと感じた次第です。

以上



写真7 戦争記念館の竹島ライブ放映（左）と撮影コーナーの模型